

「常人—スティグマ保有者統一体」概念、 その示唆するところ

— Goffman の「構造」の展開可能性 —

柄本 三代子

Goffman を構造主義者とし、自律的かつ主体的個人の黙殺されたその構造はあまりにも所与的でスタティックだとする批判がある。本論では、そういった批判は一面を捉えたものに過ぎないことを指摘し、拘束的な構造を一方で論じつつその変換の実現可能性をも考慮していたのであろうダイナミックな Goffman の視角を、スティグマをめぐる議論により明確化する。また、こういった Goffman の意図を汲むことで、対象の認知をめぐる根源的な課題へのアプローチの展開可能性を探る。

I 問題

スティグマをめぐる問題は、ただ単に「ネガティブ」と想定される記号の介在した状況を扱うに止まらない。われわれが日々いかにして、自らをも含めた対象を認知したり、あるいは他者に認知されているのか、すなわち「彼女は何者か?」「私は何者か?」と問うた際の、「ニュートラル」もしくは「ポジティブ」とさえ想定されている記号の介在も波及して論じることが可能であり、アイデンティティに深くかかわる課題である。少なくとも Goffman によるスティグマの議論は、スティグマなど介在していないかのような「常態」における対面的相互作用に対してもその射程は及んでいる。というよりはむしろ、病理的問題は何もないかに見える、あるいは実際にそのようなことは問題とされない、対面的相互作用における印象操作の形態の言及とその分析へアプローチする一つの手段的事例

として、スティグマが論じられたのではないだろうか。そこで本論は、まさに「烙印」的な用いられ方をする記号はもちろん、他者をアイデンティフィケーションしたり他者や自らによりそうされる際日常的に用いられるあらゆる記号が、頻度の差こそあれ、常にスティグマ化する可能性に晒されているのではないか、ということ考察の射程に入れている。また、その問題化が本論の課題でもある。

さて、Goffman に関しては、彼を構造主義者にカテゴライズし、その描く構造は極めてスタティックで、厳然たる所与性の下に論じられているとする批判が少なくない。確かに一連の研究において構造主義的な側面は散見できるが、その性質や展開可能性については未だ議論の余地がありそうだ。本論では、「Goffman のスタティックな構造」に対する批判を再検討することにより、彼のより発展的かつ有効な側面を浮かび上がらせることを目的としている。

彼の理論の展開可能性を指摘するにあたっては最終的に、『スティグマ』(Goffman [1963 = 1987])の中で議論されている「常人-スティグマ保有者統一体 (normal-stigmatized unity)」という独特な視角に焦点をあてる。彼の描く「スティグマ保有者」は決して固定的かつ状況外在的な属性を持つ者(だけ)であるわけではない。「常人-スティグマ保有者統一体」概念によって、「常人」と「スティグマ保有者」との間にある、「分断」およびそれらの「分節化」そのものに対する問題提起を意図としていることは明白である。さらにはこのことから、ダイナミックな構造変換の可能性への示唆を汲み取ることを、本論での主眼としたい。これはまた、先に述べたような視点に立つ時、自己をも含めた対象を認知する際に自ずと要求されるアイデンティフィケーションの、その様相の探究に深くかかわる問題であることはいうまでもない。

II Goffman の「スタティックな構造」をめぐる諸批判

(i)Goffmanの構造

Goffmanの主たる関心は「経験の組織化」に関するものであって、社会の組織化に関するものではない。社会的組織化や社会構造といったような社会学における核心的な問題のすべてについて語ることを主張するわけではない。

(中略) [Goffmanは] 社会生活の構造についてではなく、個々人がその社会生活のあらゆる瞬間に持ち合わせる経験の構造について述べる」(Goffman [1974:13])。このように、Goffmanによって想定される「構造」は、いわゆるマクロな全体社会を指す「社会構造」とは一線を画するものである。また彼のいう

「構造」は、「社会構造」の諸部分や諸要素として還元されるべきものでもなく⁽¹⁾、研究対象として独自のフィールドを要するものである。それは、二人以上の人物が双方の反応を確認できる、いわゆる対面的な社会的状況においてもたれる相互行為秩序 (interaction order)、すなわち、件の社会的状況内において用いられる状況適合的な規則の様態をとるものである (Goffman [1983])。これはいうまでもなく「フレーム(frame)」の概念と密接な関連をもつ。Goffmanによる「フレーム」は、人々がある出来事を認知する際に予め共有されているもので、その使用によってはじめて、対象の位置づけや知覚、すなわちアイデンティフィケーションが可能となるとされている (Goffman [1974:21])。このような考えによりGoffmanは、われわれの行為に対し規範拘束的な構造を描きだす。人間主体に対し外在的なそれはいつしか内面化され、件の「集まり (gathering)」や「相互受け入れを承認しあう関係」としての「出会い(encounter)」(Goffman [1961:17-18 = 1985:4-5, 1967:144-145 = 1986:146])において自らと他者の面子を救い相互行為を円滑なものにし、ひいては事態を救う為、意味的な秩序となり、人々をこれに従わせることとなる。

さて、Goffmanをシンボリック相互作用論者あるいはその分派として位置づける概ねの傾向に対し、より多くの示唆をGoffmanに見出すGonosは異議を唱えている。彼は両者の鋭い乖離を指摘するとともに、Goffmanを構造主義者とする見解を示している⁽²⁾。それによると、シンボリック相互作用論者らは「日常的な状況における、世界を構築する人々の能力を強調し、それらを社会的な変化の源泉と見ている。一方、[Goffmanの] フレームの概念は社会

構造の継続的存続の為の『支持者』として個人を考えるように Goffman を導いている。

〔Goffman にとって〕個人は、活動の型を生活に持ち込むことを要求される『資源』または『素材』である」(Gonos [1977:866])。

(ii) Goffman の構造に対する批判

この Gonos の言及の根拠となっているのは主に『フレーム分析』(Goffman [1974]) であるが、この著作に対する Jameson の書評では、Goffman の非人格的な (impersonal) 関係に基づく分析法とその構造主義的側面が批判的に指摘されている (Jameson [1976])。他にも Goffman の構造主義あるいは構造主義的パースペクティブ偏重 (の萌芽) と、それゆえの「人間不在」に対する批判は、例えば Frank, A. W. [1979]、Denzin = Keller [1981]、Rossi [1983=1989] によるものがある。ここでは、彼らの批判が、Gonos により好意的な指摘を受けた同じ側面に関するものである点に注目したい。以下、典型的と思われる部分を挙げておく。「Goffman における行為者は、世界をみるのにたった一つのフレームだけ有する、〔バラバラの〕単一体である。『フレーム分析』の中に相互行為はない。個々の自己は蚊帳の外に追いやられている。Goffman の手元の企図にそれらは必要ないのだ」(Denzin = Keller [1981: 59])。「社会的相互作用に対する主観性の構成的貢献は、Goffman のパースペクティブにおいては完全に看過されている。(中略) また、創造的な主観性を看過したことに加えて、“自明視された” 規範的枠組みにもとらわれている」(Rossi [1983=1989:263])。要するに、主観的かつ主体的な自己の自立性を黙殺し、一方で件の行為に対し拘束的となる、スタティックな

規範的フレームの所与性に立脚しているということである。

また、Goffman の当初からのテーマでもあるドラマトルギー的モデルについては、Gouldner によって同様の批判が以下のようになされている。「〔Goffman によっては〕ひとは何ごとかを行おうと試みるひととしてではなく、何ものかであろうと努めるひととして眺められる。」「Goffman は、人びとがいかにして (中略) 社会体系の構造を変革しようとするかという問題を扱うことなく、むしろ反対に、人びとがどのようにそれに対して適応し、またその内部において適応するかの問題を扱うのである。それはいわば<第二次的適応>についての理論である。つまり、人びとは手も足も出ない圧倒的な社会構造にたいして<第二次的適応>を行うのであって、この構造を所与のものとして受け入れざるを得ないと感じるのである」(Gouldner [1970=1978:511, 514])。

(iii) 「<self-empowerment> の不在」に対する批判

以上でみてきたような批判を受ける所以の一端を、本論で以下主にとりあげる『スティグマ』に見出すことは可能である。そこでさらに検討したいのは、スティグマを課された人物をめぐる変わりゆく社会的コンテクストを鑑みた際、Goffman の理論は限界を有しているという、Frank, G. による批判である。「Goffman の分析によると、スティグマに関する経験は、〔スティグマ保有者らを〕彼らの〔常人との〕違いを示す記号をまぎらわしたり隠したりといった実践の取り入れへと導く」(Frank, G. [1988:96])。常人ら (normals) による拒否が、常人としてパスする為の手立ての実践へとスティグマ保有者等を導くという Goffman の見解を

このように単独で切り取ってくると、あくまで当該の状況を拘束している規範は、常人側の論理に基づくものしか考えられていないかのような印象を確かに受ける。またさらに Frank, G. は、生まれながら四肢に非常に重い複数の障害を持つ三人の事例にもとづき、彼女らが社会的コンテクストを変化させていく際の、ある種の自己呈示による自己への権能付与（以下“self-empowerment”）について述べている。三人共に、思春期から成人にいたるまでに義手あるいは義足を付けることを拒否している。それぞれ高校、大学、大学院で「普通」教育を受け、結婚の経験もあり社会的にも経済的にも自立している。自ら率先して公の場に出ていき、ある時は積極的に社会進出する障害者のスター的存在としてマスコミの注目を集める一方で、常に自ら障害を持つ者とアイデンティフィケーションし、他者に対してもそのままに自己呈示する。ひいてはハンディキャップを負った他の人びとの励ましになったりもする。このような彼女らの行動は、Goffman のいう「カヴァリング」や「パッシング」（後述）を超越したもので、まさに“self-empowerment”によるものであるとしている。そこで Frank, G. は、個人的なライフ・ヒストリーを追う必要性を訴える一方、Goffman が研究を重ねていた 50 年代と現代とでは障害者をめぐる社会的状況はかなり異なっていると述べる。つまり、スティグマ保有者らをめぐる環境の歴史的変化はもちろん、新しいタイプの社会的役割を担うスティグマ保有者らの様子を広く伝播させるという機能を果たすという意味で、マスコミの影響も少なからぬものがあるというわけだ。彼女らは、周囲の人々に直接的に対面し、あるいはテレビや新聞を通じ、従来の画一的な障害者に対する認識と、自らの認識さえ変化させていった

のであり、変化させていくことができたのだ。

「彼女らの効果的な自己呈示の能力は、身体の障害以外に有している『正常性(normality)』によって高められ」る一方、「〔スティグマの〕可視性の戦略的な利用は、『常人』らによる、彼女らの生活に対するネガティブな解釈に挑戦するのだ」（Frank, G. (1988:114)）。そこで彼は以下のように Goffman を批判する。「Goffman のスティグマ論は、スティグマの生起する状況に、『われわれ』と『彼ら』という二分法を前提としている。⁽³⁾ 社会的規範からの逸脱という考えに始まり、社会的規範に準拠した公の状況の中でいかにスティグマを持つ者としての行為や反応に服従するかを示す際、『常人』の視角を取り入れる傾向にある」（Frank, G. (1988 : 106)）。

Frank, G. による以上の指摘はやはり、先に検討したような、Goffman の相互作用的な状況における規範拘束的でスタティックな捉え方への批判にあたるものと考えられる。当該の状況を律する規範、すなわち「常人」がある人びとを同じ「常人」として認めない根拠となる規範により、参与者らが「常人」と「スティグマ保有者」とに分断された際、その枠組みを変えうる可能性については閉ざされたままで、終始それに拘束されている、と Goffman のスティグマ論を解釈した上での批判である。

だがしかし、Goffman のスティグマ論、ひいては構造としての相互行為秩序の概念には（ページをさいて明確に述べられていないとしても）、この章でみてきたような批判が「不在」と指摘する視点は、本当に内包されていないのだろうか。それどころか、彼らの指摘は Goffman の議論を展開させるものであって、少なくとも否定するものではないのではないか、というのが本論の立場である。

III 構造の変換

(i) 『スティグマ』における拘束的側面の記述

『スティグマ』では、社会的アイデンティティ、個人的アイデンティティ、自我アイデンティティといった三種のアイデンティティが、理論展開の為の手段的概念として提示されている⁽⁴⁾。

先ず社会的アイデンティティは、先に示した諸批判の指摘する側面の記述に用いられているといえよう。すなわち、「すでに信頼を失った者」とそれ以外の人物との、与件的な二項対立関係をめぐる状況の記述である。そこではあくまでも、信頼を失ってしまった状況が、それ以前とそれ以後の状況との時系列から切り離され記述されている。これはまさに構造主義的な分析の手法といえよう。ゆえに、「スティグマと社会的アイデンティティ」の章において、常人とスティグマ保有者との差異性は、両者の二項対立的な関係を決定的でスタティックなものにする要因として記述されている。「スティグマのある人と交渉する人びとは、彼にふさわしい敬意と顧慮をえてして払わない。(中略)スティグマのある人はこの否認に呼応して、自分の属性のあるものが、そういう扱いを受けても止むを得ないものであることを認めるのである」(Goffman [1963:8-9=1987:21])。

また個人的アイデンティティという概念により、件のスティグマをスティグマたらしめている規準の拘束下における、スティグマ保有者自らによる自らの情報操作が説明されている。これはあくまでも、常人側の論理に協力的、もしくは依存的で従順な類の処理の仕方であって、抗うものでは決してない。例えば「信頼を失う事情のある者」がいかにかそれを隠し通していくか(passing)、あるいは非常に可視的でパッシ

ングもままならないのであればそのスティグマがなるべく人目につかないように、出会いの場にもたらず影響をできるだけ軽減させるよう何らかの偽装の工夫をする(covering)、といった類のものである。これは先の Frank, G. に批判の一理由として指摘された点である。

さて以上の他者規定的な二種のアイデンティティと一線を画すると思われるのが自我アイデンティティだ。この概念により、スティグマ保有者の側に位置づけられた人が、その関係性を律する規準に拘束されつつもその拘束に対し葛藤をおぼえたり抗ったりする、両価的な感情の主観的反省的側面が記述されている。両価的とはすなわち、周囲と自らによって他の誰とも同じ「常人」であると規定されつつも、彼は「ある程度<異常>であり、この異常さを否定することは愚である、とも宣告」されるのである(Goffman [1963:123=1987:201])。しかし、これもやはり実際の行動としてその「抗い」が記述されているわけではなく、内面的葛藤として述べるにとどまっている。

(ii) <突破>

可視的なハンディキャップをもつ人と、そうでない人とが対面的に接する場において、その可視性は、スムーズな相互行為を妨げる脅威となる可能性がある。この場合の常人の側は、その可視的なハンディキャップによって少なからぬ衝撃を受けた当惑を隠すため、いかにかそのハンディキャップを気にしていないかのように振る舞うというような、虚偽的な行動をとるかもしれない。この虚偽に則った「受け入れ」と、それが持続できる状況の維持形成に対し、ハンディキャップを持つ側の人もある程度協力することになる。これは Goffman の「集まりの維持」という考え方に密接に基づいた示唆であ

る。Davisはこの示唆に依拠しつつ、この虚偽的な「受け入れ」による関係を脱し、常人同士としての関係性への移行過程についてさらに議論している。この関係性の変換は常人化の過程とも解されるわけだが、ハンディキャップを負う側の人には<突破 (breaking through)>と認識される(Davis [1961:128])。これは虚偽の受け入れの状況を脱却して進む動きで、逸脱の汚名に関連づけられている以外の関係における彼のアイデンティフィケーションを常人の側に促すようなイメージや態度や自己概念を、ハンディキャップを持つ側の人々が投企する(projects)ことによって実現される、再定義の過程である(Davis [1961:127])。要するに<突破>は、その場を統制していた何らかのコンテキストに変更を迫る行為により可能となるものだ。もちろん、人によってその技術的な熟達の度合いが違いただろうし、アプローチの方法にも幅があるわけだが、彼らに共通のねらいは、偏狭な虚偽の受け入れと、より自発的な関係性との間にある障壁の克服である(Davis [1961:128-129])。

このような、スティグマを負った者が主体的に枠組みを変換していくという側面は、先にみた諸批判によるならば、Goffmanの理論に欠落した部分となるだろう。しかし以下で検討するように、その場の枠組み(すなわちGoffmanのいう構造)を変換する視点がGoffmanに欠けているとは言い難い。

(iii) 構造変換の可能性について

ところで、心理学的な意味での「性格」には通常、personalityと区別されるcharacterという語が用いられる。前者は個人が同一で統一性を保っていることを特に言い表そうとしているもので、後者は統一ということよりも、他人

と違っているという側面を強調したものである(宮城編 [1979:128, 191-192])。このようにcharacterとは、ある人物を他者と区別する際の認識票となる記号という意味に解し得る。このcharacterをめぐるGoffmanの言及に、以下のような興味深いものがある。「characterを提示ないし表現することは、characterを生み出すことである。要するに自我は、自発的に作り直されるのである。」「個人は、それ以降、自分のものとなる特徴(traits)を決定すべく行動することができる」(Goffman [1967:237-238=1986:243-244])。

またGoffmanは、Linton, Ralphに代表される従来の役割理論の分析的枠組みについて、その不十分な点を指摘し、「役割距離(role distance)」なる概念を提示している。これは、個人と、その個人が担っていると想定される役割との鋭い乖離を指摘するものである(Goffman [1961=1985])。「役割分析の通常の決定論的な意味合いに従えば、その個人は、自分自身について利用可能な情報を宿命的に受けとめるのではないかと思われる。それでも、個人の瞬時から瞬時への行為により接近してみると、彼は自分に関して生み出される潜在的な意味に直面して終始受身ではなく、安定性のある、しかも自分自身に対して持っているイメージと一致するような状況の定義を支持することに、できる限り積極的に参加していることがわかる」(Goffman [1961:92=1985:110])。また役割距離という概念は、「人が、自分自身の中にある何ものかが、その瞬間の拘束の外部に、そしてその瞬間が発生する、その管轄権の内部にある役割の外部に存在することを示すことを可能にしている」(Goffman [1961:101=1985:124])。

さらには、III章の(i)で先にみたような拘束の側面を描いているGoffmanのその著『スティ

グマ』には、一方で以下のような言及がある。スティグマ保有者は、他の人間と違うところのない者であると自己規定すると同時に、周囲の人びとがそう見ているのと同様、別種の人間としても自己規定しているというジレンマに関する指摘だ。このジレンマを脱却する方途を探し求めようとする「努力は現代社会にあっては、欠点のある者がコードとなるものを独力で工夫して打ち出そう(hammer out)と試みる⁽⁵⁾」という形ばかりでなく、(省略) 職業的代弁者たちが(省略) 援助の手をのべる、という形でも行われている」(Goffman [1963:108-109 = 1987:178])。

以上のような Goffman の指摘に典型的にみられる知見は、ハンディキャップを持つ者としての、スティグマ保有者としての、逸脱者としての、さらにはその他の「～として」の役割や関係性に基づくあるカテゴリーと、そこからはみ出す本人自身との間隙を指摘し、その関係性の変換を試みる選択の可能性と、その現実的な達成の可能性を示すものと考えられる。

(iv) Goffman のパラドックス

Goffman による以上のような言及は、先に見た諸批判の根拠を揺るがす言及といえよう。確かに、諸批判の指摘する側面は III 章の (i) で検討したような点をはじめ、Goffman の一連の言及の随所に見られ、本論ではそういった批判は誤っているとして全面的に否定することはしない。しかし、それは一側面を捉えたに過ぎず、他方で本論において主に注目しようとしている、構造を変換する側面との理論的整合性を有していることも否めない。その場を律する規準において、スティグマのある者と常人、より優れた者とより劣ったもの、またあるいは「A」と「非 A」という瞬時にして分けられる

二項対立的な関係を方法論的前提としつつも、その規準の変更を迫る行為選択の可能性への Goffman の「言及の重要性」とその意味するところを検討したい。本人自らパラドックスとことわりつつ、両側面各々の重要性を指摘している。

両側面のうち一方の側面はいうまでもなく、例えば常人とスティグマ保有者といったような関係性を規定するのは、われわれに等しく分有されている所与的な規準で、これがある種の構造を構成しているという側面である。「社会が存続するには、一つの実際の社会的場面から次の場面へと、同じパターンが受け継がれなければならない。ここで必要なのは、規則であり、慣例である。人はすでに自分たちのものとして受け容れている特性にあわせて、自分たちを規定し、それに沿って行動せねばならない。」また「character は、一方では個人の中で本質的かつ不変のもの、つまり、その人間に <特徴的(characteristic) > なものを意味する」(Goffman [1967:238-239 = 1986:244])。Goffman はこの側面については先にみたとおり、もう一方の側面よりもかなりの労力をかけ議論している。

ところが一方で Goffman は先にみたように、「これは一つのパラドックスである。character は不変でありながら、変化しうるのである」とも述べる。「～として」他者と区別(する)される際に要求され供給されるわれわれの character は「他方では、運命的瞬間に発生したり、崩壊してしまったりしうる特性をも意味する。」「つまり変化することのない、まぎれもなくわれわれ自身のものでありながら、しかも事情次第で、変わりやすい何物かである。character に関する可能性は、われわれが接する、社会活動のどんな瞬間にも、われわれの努

力、とりわけ社会的な努力を更新するよう奨励する。そして、古くからの慣例を維持しうるのは、まさに、こうした更新があるからこそである。われわれの直面する瞬間には、打ち克つべき何物かがあるからこそ、社会はその瞬間に直面して、それを克服することができるのだと考えてよいのではないだろうか」(Goffman [1967:239=1986:244-245])。

こういった対面的相互行為における「パラドックス」について以下のようにも述べている。「個人の仕事上の諸行為は、公式の状況の定義づけを反抗しないで固守しているけれど、それでいて他方では、同時的な、干渉されないで保持することができる身振り活動が、現在、公式になされていることが、彼自身のすべてを定義づけることには同意していないことを示す」(Goffman [1961:118=1985:147])。また、先に挙げた Denzin=Keller による『フレーム分析』の書評に応え、「私の関心の領域は単に、対面的行動や、そのような行動の体系が引き起こすフレームの問題にあるのではない。われわれ自身の長期にわたる関係やコミットメントの理解、及びわれわれの社会で広く制度化されている企て(enterprises)の理解は、さまざまな場合を通じての、その確立と浸食⁽⁶⁾を条件とするであろう」(Goffman [1981:68])とも述べている。

以上のことから、規範拘束的な構造を、その分析対象とする一方で、それに拮抗し構造の変更を迫りその浸食を促すやもしれない行為、いわば Goffman 流の“self-empowerment”の存在も重要視していることは否定しがたい。またこのことは先述 Davis が問題にしていたような意味での、スティグマ<突破>の可能性を示唆するものでもある。

さて、方法論的手法であるにせよこの拘束的な構造に自ら問題を投げかけていることがより

明確なのが「常人-スティグマ保有者統一体」という概念ではないだろうか。以上のような両側面に着目するその意思を「パラドックス」のまま終わらせるのではなく、理論的整合性とその展開可能性とを以下で検討する。

IV 「常人-スティグマ保有者統一体」概念の示唆

(i) 構造を変換する自己とは

本論は先に検討した Goffman に関する様々な批判的解釈を「一面だけ」認めつつ、佐藤による以下の示唆に追従する。Goffman は「特定の定義が状況を管理しているという考えから出発し、『私は物事の成り行きに逆らわないで、それについていく。しかし、同時に、私はその情勢にすっかり包み込まれていないことだけは、知っておいていただきたい』(Goffman [1961:117-118=1985:147])と主張しているのである。ゴッフマンはやはり『外部の世界の揺るぎない性格』のもとでパーソナル・アイデンティティや自己性、またリアリティの存在を探究し続けていたといっていよいよだろう」(佐藤 [1985:230])。

ただし、誤解を恐れずにいうと、あらゆる規範的拘束からのがれている自律的な個人を Goffman の議論の中から見つけ出し、感情的に賞賛すること、ロマン主義的な意味での個人主義を主張することは本論の意図するところではない。

以下では、III 章においてはあえて保留のまま論じていた「構造の変換」ということがどういうことを意味しているのか明らかにしなくては行けない。これは II 章でふれた批判者らが、Goffman の議論において黙殺されているという、何らの規範的拘束からも自由な、主体的

で主観的で自律的で創造的で人間的な、そんな自己により達成されるものなのだろうか？ またこれは Frank, G. のいう意味での“Self-Empowerment”によるものなのだろうか？ はたしてそんな自己を Goffman は想定していたのであろうか？ III 章の (iii) や (iv) で検討してきたような Goffman の知見の発露になっているのはそんな自己を想定しているからであろうか？

答えは否である。Goffman のいう自己は、Mead, George Herbert の概念を借りるならあくまでも社会的自己である“me”を指すのであって“I”ではない⁽⁷⁾。これは Zeitlin によって以下のように批判的に指摘されており、この指摘は II 章でみてきたような諸批判と通底する。「〔Goffman は〕役割からのある程度の自由を希求するものとして個人を認めつつも、自由を希求するこの傾向を説明するために、Freud の概念も Mead の概念も使用することはしない。(中略)〔また Goffman は〕役割に抵抗する、活動的で創造的、かつ自発的な存在としての人間的な個人を認めることを拒否する」。決定論的な従来の役割分析に修整を迫ろうとする概念「役割距離」をもってしても、人間は役割の束以上のなにものかであるということを否定する着想にしがみついている、と Zeitlin は述べる (Zeitlin [1973:207-209])。若干の歪曲は否めないがこの指摘は概ね Goffman 自身の着想と重なる。「個人は、一つの集団から自由になっても自由にならない。なぜなら他の集団が彼をつかまえてしまうからである」(Goffman [1961:123 = 1985:155])。また「個人が状況にかかわりのある自己から撤退するときは、彼は自分でつくったある心理的世界に引きこもるのではなく、むしろ、ある他の社会的につくられたアイデンティティの名において行

為するという事に注目することによって、われわれはこのことを始めることができる。状況にかかわりのある自己に関して個人が持つことのできる自由は、他の、同等に社会的な、拘束がある故に持つことができるのである」(Goffman [1961:107 = 1985:132])。

Zeitlin の批判も先の II 章でみてきた諸々の批判と同様、ある一面を的確に捉えたものではあるが、本稿においては「Goffman 批判」とみなしえない。以上でみてきたように Goffman における自己は常に「～としての」自己であり、あらゆるカテゴリーから「自由」となることはない⁽⁸⁾。つまり、(例えばスティグマを付与されることにより)ある人物が、その構造の変換や修整、あるいはそこからの脱却を企図するということは、「～として」という自らによる(場合によっては支持者や代弁者による)アイデンティフィケーションを経た次なる構造への移行を図るということである。あくまでも、規範的拘束の何もないところから新たに構造を創造するのではない。もし新たに創造された「思われて」いたとしても、それは他の「フレーム」から型どられ転調(keying)されたものであろう (Goffman [1974:43-47])。それでも、そこに「変換」はある。構造から構造への何らかの「変換」により、ある人々(例えばある状況で「スティグマ保有者」側に位置づけられているような人々)が Davis のいうようなく突破>を経験する可能性は否定し難いし、より「ポジティブな」「～としての」関係性へと“Self-Empowerment”が発動されることも容易に考えられる。

構造から構造への変換の可能性だけでは、それでもやはり人間的自由はありえないというのなら、われわれはどうやって存在し、他者や自らにどう認知されればよいのだろうか。以上で

みてきたような変換の可能性をもった構造に対し、それでもなお人間不在を訴え「人間の自由」を要求するのはあまりに感情的と思われる。相互行為を成立させるためには、また実際に成り立っている（と思われている）相互行為を鑑み、何らかの社会的コードの存在を常に想定することは極めて妥当である。

(ii) 実際の行為と、それに対するカテゴリー

Goffman は『スティグマ』の終盤において、「ノーマルな（範囲の）逸脱（normal deviant）」や「自己-他者統一体（self-other unity）」「常人-スティグマ保有者統一体（normal-stigmatized unity）」という概念を提示する。それまであえて二項対立的に論じられていたスティグマのある者と常人とは、実はそれぞれがお互いに相手の一部をなすものである、ということを含意するものだ。これにより、件の状況において「常人として」あるいは「スティグマ保有者として」関係づけられている彼女の経験の構造の変換可能性を示唆している。

したがって、Goffman にとっての「スティグマ」とは、スティグマのある者と常人の二つのグループに区別することができるような具体的な一組の人間を意味するものではなく、広く行われている二つの役割による社会過程を意味しているということ、あらゆる人が双方の役割をとって、少なくとも人生のいずれかの脈絡において、いずれかの局面において、この過程に参加しているということ」（Goffman [1963: 137-138 = 1987: 225]）を示す暫定的かつ道具的な概念ということになる。換言すると、「常人」とか「スティグマ保有者」というカテゴリーは Goffman にとって生ける人間全体を指すものではなく、すなわちスティグマを必

ずしも実体的な属性に起因するものと考えられるのではなく、変換可能な視角によって提示されるものとしている。

カテゴリー化による秩序付けという行為を通じて、人間は自らにとって未知のもの、関わりのなかったものを自らとの関連で捉え、自らの経験の構造の中に組み込んでいく。そうしてその記号によって捉えられた対象が、新しい経験として加えられる。例えば、ある人物が「精神病」であると医学的に判断が下されることにより、自らの象徴体系に安定感を得た人びとの存在は否めない。ある種の不可解かつ不安定で「不適切な」行為や状況に対し何らかの「解答」を要求するのだ。「精神障害」という記号をもってその「徴候」が認められている不適切な行為と、そういう記号が付されていない不適切な行為の比較により、カテゴリーと実際の行為の間の不安定な関係性について Goffman は以下のように言及している。「徴候的な状況不適切と、非徴候的な状況不適切とのあいだの画然とした区別は、われわれが日常生活の中で相手を判断するさいの概念的装置である。しかし、問題は、それが対象となる実際の行動と安定した関係をもっていないようにみえることである。極端な事例を除いては、ある行動をどちらに分類するかについて、何の同意もない。ほとんどの場合、同意が生まれてくるのは、事実のあとからである。すなわち、それは、『精神障害』というラベルがはられてから、あるいは（他のケースでは）そのようなラベルをはることが完全に否定されてからのことである」（Goffman [1967: 142 = 1986: 142-143]）。

件のカテゴリーにあてはまるのか、あてはまらなければ他のどんなカテゴリーにあてはまるのか、といったことが常に要求される。「われわれの社会では一般に、あらゆる事象は（例外

なしに) 慣習的な信念体系の内部に包摂し、処理することができるのだというきわめて重要な仮定が設けられている。われわれは未だ説明されていない事象には耐えられるが、説明不可能な事象に耐えることはできないのである」(Goffman [1974:30])。

前節で検討したように、他者や自らにより「～として」規定されて初めて、対象の理解が可能となってくるのではないか。「ある役割を受け入れるということ (to embrace) は、その状況のなかで得られると見なされる虚構の自己の中に完全に消えてなくなることであり、完全にそのイメージとのかかわりで見られることであり、役割を人が受け入れていることをはっきりと確証することである。役割を受け入れることは、役割に受け入れられることでもある」(Goffman [1961:94 = 1985:113])。このようなカテゴリー化による分断により、実際の行為を解釈する際にそこへ対象を収斂させてしまい、連続性は捨象され差異性のみを示す垣根が生じてくる。「あらゆる場合に、状況にかかわりのある活動役割から発生した自己と、その名で活動が行われるさいの役割称号と結びついた自己とのあいだには、ある程度の亀裂があることは確かである。役割距離はこの亀裂を立証している」(Goffman [1961:119 = 1985:149])。

Goffman が議論の射程としているスティグマは、強烈で深刻かつ可視的な、まさに「烙印」そのものを原初的イメージとしつつも、より包括的な概念として展開されている。「スティグマ操作はどの社会にも普遍的に認められる要件、すなわち、いずれの社会でもアイデンティティに関する規準が存在するところには生起する過程であるということである。同一の要件がさまざまな形で、主要な異常さ、すなわち伝統的にスティグマと定義されている種類のものが問題

になるときも、あるいはまた面目を失った人が恥じたことを〔のちに〕恥ずかしく思うほどの取るに足らないスティグマが問題になるときも、いずれの場合にも含まれている」(Goffman [1963:130=1987:213-214])。このような、傷つけられやすく汚されやすいアイデンティティの検討により、Goffman にとってのアブノーマルは常にノーマルな何かしらをものがたる (Drew & Wootton [1988:7])。また、Davis のスティグマ<突破>をめぐる先の議論も、説明手段的に可視的なスティグマを持つ人びとの事例をもとに展開されているが、「可視的なハンディキャップを持つ人の遭遇する相互行為における諸問題は、われわれ皆が直面している相互行為における問題と、頻度や程度こそ低いものかもしれないが、それほど異なるものではない」(Davis [1961:132]) という視点を前提とするものである。これらの指摘は同様に「自己-他者統一体」概念を導き出す。

例えば「ニュートラル」に働く女性一般を指すと想定されていたり、もしくは「花の」と冠されるように「ポジティブ」とさえ想定されている「OL」というカテゴリーは、「ワーキングウーマンの私をOLなんかと一緒にしないでよ!」という「OL」による強烈なクレームを引き起こす可能性を孕んでいる⁽⁹⁾。Goffman による先の議論は、このような無意識的でわかりにくい、あるいは「ポジティブ」とさえ「思われている」かもしれない他のあらゆるカテゴリーについても同様の問題の提起と分析を可能にするものと思われる。

V 結語

Goffman はこれまで批判されてきたような規範拘束的な構造を論じつつも、その側面の

みに囚われていたのではない、ということの本論では明確化した。彼による構造は、社会的自己による構造の変換可能性を一方で認めたもので、ダイナミックな側面にも開かれたものである。またこれは、他者と自らとに同様に共通の能力を前提とした相対化の思想でもある。何らかのスティグマにもとづく関係性を変換（Davisの言葉を借りれば〈突破〉）する可能性の指摘や、連続的な統一体として常人とスティグマ保有者、ひいては自己と他者を考察する視点は、対象をある「～として」認知するその根源的なシステムの分析において有効かつ必要な前提となるものではないだろうか。規範拘束的な構造をそれとして分析する意義を積極的に認めつつ、そこに拘束されつつも何らかの「～として」他者や自らによるアイデンティフィケーションを可能にし、時としてその変換を迫るやもしれぬ自己の存在を射程に入れた Goffman の議論は、先の諸批判に反して今後の展開の可能性を十分に孕んだものといえよう。

以上で検討してきたように、スティグマをめぐる議論と課題は、何らかの категория が認識の手段として常に用いられている「常態」を考察する際にも同様の問題を提起する。われわれが社会を構成する際に必然的に生じるカテゴリー化による秩序づけは、分断のみを示すカテゴリーと、連続的な実際の行為との理論的区別を前提としてはじめて分析可能となってくるのだ。個人を「～として」の存在に分断させてしまう力と、連続性の双方を示唆した Goffman の議論を「パラドックス」のまま終わらせるのではなく、その積極的な意義を検討吟味し、理論的かつ実証的に展開させる試みが今後期待されるであろう。

注

(1) Collins は、Goffman の概念を援用してのマイクロ・マクロ連鎖をめぐる議論の際、「相互行為儀礼連鎖 (interaction ritual chains)」なる概念を提示している (例えば Collins [1987])。一方こういった連鎖について Rawls は否定的な立場をとる (Rawls [1989])。Goffman の構造に関連した、このような社会構造との「連鎖」や「還元の可能性」(あるいは不可能性) 及びその意義の有無については論を改めて検討したい。

(2) 本稿は、Goffman に対し特にどういった分類が適切であるか議論することを目的としない。既存の主義・理論・学派に収斂させる試みは、せっかくの超学派的知見を矮小化し封じ込めてしまうことになりはしないだろうか (このことについては Rawls [1989] も参照)。ただし本論は、Goffman の議論にみうけられる「構造」的側面がどういった展開の可能性を孕んでいるのかを検討する。それが「構造主義」と直結する印象は拭えないかもしれないが、ならばいかなる「構造主義」であるのか今後改めてその独自性を検討することは有効であると思える。

(3) 傍点は本稿筆者による。

(4) Goffman のいうアイデンティティの概念は、例えば Erikson, E.H. の用いるそれとはかなりの相違点を有する。諸分野におけるアイデンティティをめぐる議論については論を改めて検討したい。

(5) 傍点は本稿筆者による。

(6) 傍点は本稿筆者による。

(7) これについては Goffman [1961:77=1985:88]、[1967:84=1986:81]、[1971:327-328] 等参照。

(8) こういった考え方の源泉は、Durkheim によるそれに認めることが可能である。このことについては、例えば Collins [1988] によっても述べられている。Goffman と Durkheim、両者の議論に関する綿密な比較検討は本論においては割愛する。しか

し、尾高による以下のような Durkheim に対する指摘が、本論において参考になったことだけ言及しておく。「デュルケームは個人の自由や主体性を無視した議論をする、という非難もしばしばかかる。(中略)だが実際には、デュルケームは固有の意味の社会実在論者ではなかった。(中略)実在論者は超個人的な主体としての社会の実在を信じていたのにたいして、デュルケームはむしろ超個人的な客体としての制度や行動様式の機能を問題としていたからである。みずから考え行動する主体としてデュルケーム

がみとめたものは、個々の人間だけであった。(中略)ひとたびつくりあげられ、客体化された文化は、個人にたいして外在的な独自の実在として、個人にたいして拘束力をもつようになる。(中略)それが独自の思考力や行動力をもつ超個人的な主体であるということを意味するものではない」(尾高〔1980:31-32〕)。

(9)「OL」を一種のスティグマとみた議論に関しては拙稿〔1992〕参照。

指示文献

- Collins, Randall. 1987. "Interaction Ritual Chains, Power and Property: The Micro-Macro Connection as an Empirically Based Theoretical Problem" *Micro-Macro Link*, University of California
- Collins, Randall. 1988. "Theoretical Continuities in Goffman's Work," Drew, P. & Wootton, A. (eds.), *Erving Goffman : Exploring the Interaction Order*, Polity Press
- Davis, Fred. 1961. "Deviance Disavowal: The Management of Strained Interaction by the Visibly Handicapped," *Social Problems*, IX
- Denzin, Norman K. & Keller, Charles M. 1981. "Frame Analysis Reconsidered," *Contemporary Sociology*, (10)
- Drew, Paul. & Wootton, Anthony. 1988. "Introduction," Drew, P. & Wootton, A. (eds.), *Erving Goffman : Exploring the Interaction Order*, Polity Press
- 柄本三代子 1992. 「戦略的スティグマ利用の諸契機——スティグマ化した『OL』に関する一研究」早稲田社会学会編『社会学年誌』、第33号
- Frank, Arthur W. 1979. "Reality Construction in Interaction," *Annual Review of Sociology*, 5
- Frank, Gelya. 1988. "Beyond Stigma : Visibility and Self-Empowerment of Persons with Congenital Limbs Deficiencies," *Journal of Social Issue*, vol.44, No.1
- Goffman, Erving. 1961. *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*, Bobbs-Merrill. =1985 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い』誠信書房
- Goffman, Erving. 1963. *Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*, Simon & Schuster. = 1987 石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房
- Goffman, Erving. 1967. *Interaction Ritual : Essays on Face-to-Face Behaviour*, Doubleday & Company Inc. = 1986 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局
- Goffman, Erving. 1971. *Relations in Publick : Microstudies of the Publick Order*, Basic Books
- Goffman, Erving. 1974. *Frame Analysis : An Essay on the Organization of Experience*, Harper & Row

- Goffman, Erving. 1981. "A Reply to Denzin and Keller," *Contemporary Sociology*, (10)
- Goffman, Erving. 1983. "The Interaction Order : American Sociological Association, 1982 Presidential Address," *American Sociological Review* 48 (1)
- Gonos, George. 1977. "'Situation' versus 'Frame':The Interactionist and The Structuralist Analyses of Everyday Life," *American Sociological Review*, Vol.42 (December)
- Gouldner, Alvin W. 1970. *The Coming Crisis of Western Sociology*, Basic Books. = 1978 岡田直之他訳『社会学の再生を求めて』新曜社
- Jameson, Fredric 1976. "Review Article : On Goffman's Frame Analysis," *Theory and Society* 3
- 宮城音弥 1979.『岩波心理学小辞典』岩波書店
- 尾高邦男 1980.「デュルケームとジンメル」『デュルケーム、ジンメル』中央公論社
- Rawls, Anne Warfield. 1989. "Language, Self, and Social order : A reformulation of Goffman and Sacks," *Human Studies* 12
- Rossi, Ino. 1983. *From the Sociology of Symbols to the Sociology of Signs*, Columbia University Press. = 1989 下田直春他訳『弁証法的構造社会学の探究』勁草書房
- 佐藤毅 1985.「初期ゴッフマンとその自己論」Goffman, Erving. 1961. *Encounters* = 1985 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い』誠信書房
- Zeitlin, Irving. 1973. *Rethinking Sociology*, Prentice-Hall

(えのもと みよこ)

社会主義とは何か、何であつたか何でありうるのか。

この間、社会主義(国)が大きく揺れ動いた。本書は、社会主義の思想と体制について、ロシア・中国・東欧・西欧を広く視野に入れながら、「社会主義とは何か」を、社会民主主義の諸相を含め、いま改めて問ひなおすもの。

◆四六判……………定価2,500円……………好評発売中◆

社会主義

それぞれの苦悩と模索

和田春樹
小森田秋夫
近藤邦康

●編

「……序章……」

思想としての社会主義 ●東京大学教授和田春樹
体制としての社会主義 ●東京大学教授和田春樹

「……PART I……」

ペレストロイカとその後 ●東京大学教授塩川伸明

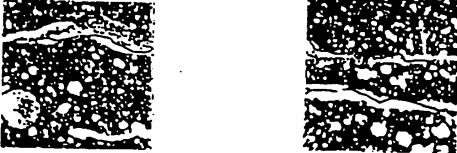
「……PART II……」


中国の革命・社会主義・現代化 ●東京大学教授近藤邦康
中国経済——12億の挑戦 ●東京大学助教授田島俊雄
ハイジャック事件にみる中国法の特徴 ●東京大学助教授田中信行

「……PART III……」

ユーゴスラヴィアの自主管理社会主義 ●千葉大学教授岩田昌征
ポーランド 連帯の軌跡 ●東京大学助教授小森田秋夫
「二つのドイツ」の苦しみ ●東京大学教授広渡清吾

現代における社会民主主義の諸相 ●一橋大学教授加藤哲郎



 **日本評論社**

〒170 東京都豊島区南大塚3の10の10
☎03(3987)8621(販売) ●振替/東京0-16